

朱の道を探る（美杉町西ノ手遺跡）

「赤色顔料」が着いた土器・石器

津市埋蔵文化財センターでは、津市の歴史を解明していくため、過去に行った発掘調査のさまざまな資料の調査研究を進めています。

このたび、平成10年に発掘調査を行った西ノ手（にしの手）遺跡から出土した弥生時代末から古墳時代初め（3世紀ごろ）の土器や石器について、新たな発見がありましたので、その成果をお知らせします。

西ノ手遺跡は、津市美杉町奥津（おくつ）にある

遺跡です。美杉小学校プール建設に伴い、美杉村教育委員会（当時）が発掘調査を行いました。

発掘調査では、弥生時代末から古墳時代初めの竪穴建物（たてあなたても）、平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物（ほったてばしらたても）、石垣などが見つかっています。この遺跡の資料の再整理を行っているなかで、弥生時代末から古墳時代初め頃の赤色顔料（せきしょくがんりょう＝赤い色の塗料）がついた土器や石器が出土していることがわかってきました。



西ノ手遺跡出土遺物



西ノ手遺跡の位置 (1:25,000)
(国土地理院地形図『伊勢奥津』から)



空から見た西ノ手遺跡



分析の様子

「赤色顔料」の正体は？

遺跡から出土する赤色顔料の主なものには、水銀朱(すいぎんしゅ)とベンガラがあります。西ノ手遺跡から出土した土器や石器に着いていた赤色顔料が、水銀朱なのか、ベンガラなのかを探る必要があります。

それを明らかにするため、三重県総合博物館の協力を得て、「蛍光 X 線分析」(けいこうえつくすせんぶんせき)を行いました。分析では、携帯型蛍光 X線分析装置を使用しました。この機械から X 線照を土器や石器に照射し、反射してくる光で、赤色顔料の成分がわかります。

水銀朱は硫化(りゅうか)水銀(HgS)、ベンガラは酸化第二鉄(Fe₂O₃)でできていますので、水銀(Hg)の割合が高ければ水銀朱、鉄(Fe)の割合が高ければベンガラということになります。

分析は令和5年8月 24 日に行いました。その結果、西ノ手遺跡で出土した遺物のうち、石器2点からは水銀が、土器2点からは微量の水銀がみつかりました。

水銀朱が着いた土器・石器の用途

水銀朱が着いた土器や石器はどのように使われていたのでしょうか？

水銀朱が着いている土器は、「鉢」(はち)という土器です。水銀朱は土器の内側に着いていました。土器の外側には、火であぶった時に着く「すす」が付いています。このような土器については、水銀朱を不老不死の薬に調合したときに用いたとする説、水銀朱を生産するときに使う過程で使用したとする説、祭祀(さいし)や儀礼(ぎれい)に使われたと



水銀朱が着いた石杵



石杵を使い辰砂を細かな粒にします

する説、朱を土器や木製品に塗るため、漆(うるし)や膠(にかわ)と混ぜるときに用いたとする説があります。他にも、煮炊きを使う「甕」(かめ)という土器の外表面にも水銀朱が着いていることがわかりました。

水銀朱が着いている石器は、石杵(いしぎね)という石器です。水銀朱は、細かくすればするほど、鮮やかな朱色になるという性格があるので、石杵を使って細かくしていたと考えられます。

遺跡内のどこから出土したか？

水銀朱が着いた石杵は、竪穴建物の埋め土から出土しています。同じ建物から出土した甕から、この建物が弥生時代末から古墳時代初め頃に使われていたことがわかります。建物は、水銀朱を精製(せいせい)する工房(こうぼう)の可能性があります。

水銀朱はどこから来たか？

それでは、西ノ手遺跡でみつかった水銀朱はどこで採れたものなのでしょうか？

西ノ手遺跡がある雲出(くもず)川流域には、水銀の鉱石である「辰砂」(しんしゃ)が採れる鉱山はありません。最も近くで辰砂が採れるのは、多気郡



石杵が見つかった竪穴建物

多気町丹生(にゆう)などの櫛田川流域と奈良県の吉野・宇陀地域です。このあたりは、「大和水銀鉱床」にあたっていて、多くの辰砂が産出したとされています。

櫛田川流域で採掘された辰砂であれば、仁柿峠(にがきとうげ)を越えるか、櫛田川を下り平野部に出たあと、雲出川をさかのぼって西ノ手遺跡がある奥津に運び込まれたと考えられます。吉野・宇陀地域で採掘された辰砂であれば、奈良県境を越えて奥津に運び込まれたと考えられます。

いずれにしても奥津の地に辰砂が運び込まれ、水銀朱が精製されていたことは間違いなさそうです。

水銀朱は何に使うのか？

弥生時代末から古墳時代初めには、水銀朱をどのように使っていたのでしょうか？水銀朱の主な用途は次のようなものだと考えられています。

① 土器や木製品に塗る

この時代の遺跡からは、水銀朱が塗ってある土器や木製品が見つかることがあります。西ノ手遺跡でみつかった鉢は、このために使ったのかもしれませんが。

② 墓に使う

弥生時代末から古墳時代初めの墳墓には水銀朱が多く使われています。大和盆地南東部の黒塚古墳(奈良県天理市)や桜井茶臼山古墳(奈良県桜井市)等では、古墳に葬られた人のまわりが水銀朱で塗り固められていました。このためには大量の水銀朱が必要とされ、各地からの水銀朱がヤマト王権のもとに集められていたと考えられます。水銀朱は、ヤマト王権によって分配され、これらの



水銀朱が着いた土器

古墳で使用されていたのかもしれませんが。

③ 不老不死の薬として使う

中国道教の教えでは、水銀から「仙薬」(せんやく)という薬を作り、これを服用すれば仙人(せんじん)になって不老不死となるというものがあります。水銀朱は貴重品ですので、それから作った薬を飲むのは、大きな権力を持つ人ということになります。

それ以外の出土遺物

西ノ手遺跡からは、水銀朱が着いた鉢、甕、石杵のほか、弥生時代末から古墳時代初めの遺物が何点か出土しています。その中には、「伊勢型二重口縁壺」(いせがたにじゅうこうえんつぼ)や、「S字状口縁台付甕」(えすじじょうこうえんだいつきがめ)があります。

これらはいずれも伊勢湾岸の平野部の遺跡で見つかるものです。また、S字状口縁台付甕は、大和盆地南東部の纏向(まきむく)遺跡(奈良県桜井市)などでも多く見つかっています。伊勢平野と大和盆地を結ぶルートの一つが、奥津を通っていた可能性が高まってきました。



遺跡出土土器

まとめ

西ノ手遺跡には、弥生時代末から古墳時代初めに、水銀朱を精製していた工房があったことがわかってきました。このような遺跡は四ツ野 B 遺跡(津市)等の平野部では確認されていますが、奥津のような山間部で見つかったのは初めてです。

水銀朱の原料である辰砂は、櫛田川流域や奈良県の宇陀、吉野で産出するものなので、遠隔地から奥津にもたらされていたことは間違いありません。もう一度、水銀朱がどこから奥津にもたらされ、どこに運ばれたのかを考えてみましょう。

考えられるルートは、①櫛田川流域→仁柿峠→奥津→大和盆地、②櫛田川流域→伊勢平野→雲出川→奥津→大和盆地、③吉野・宇陀→奥津→雲出川→伊勢平野の3つです。

弥生時代末から古墳時代初めの墳墓には水銀朱が多く使われています。特に大和盆地南東部の墳墓の埋葬施設では、多くの水銀朱を使っていました。この地域はヤマト王権発祥の地でもあり、王の不老不死の仙薬として用いられたのかもしれませんが。

これまで、伊勢の水銀朱がどのようなルートを経て大和盆地に運ばれていたのかはよくわかっていませんでした。今回の奥津での水銀朱精製遺跡の発見により、伊勢の水銀朱が奥津を通して大和盆地に運ばれていた可能性が高まってきました。

まいぶん津 第15号

発行日：令和5年10月6日
編集発行：津市埋蔵文化財センター
〒514-0058 三重県津市安東町1225
TEL 059-229-0210
FAX 059-229-4601

